

# 潜伏キリシタンの伝承物語『天地始之事』 “Tenchi hajimari no koto”: A Legend of Underground Christians in Nagasaki

梶田 叡一  
 Eiichi Kajita

キーワード： 潜伏キリシタン マルチ・アイデンティティ キリスト教の日本文化への受肉

『天地始之事（テンチハジマリノコト）』という興味深い本がある。これは長崎県の外海・長崎・五島地方、すなわち西彼杵（ニシソノギ）半島や五島列島の潜伏キリシタンに伝えられてきた教典的な伝承物語を筆録したものである（注1）。

## I. 【潜伏キリシタンと呼ばれる人達】

キリシタン禁教時代、長崎県の天草地方や外海地方、生月島や平戸島など九州西北部の幾つかの地域のキリシタンは、厳しい弾圧のもと、明治初期のキリスト教公認まで、長い潜伏生活を余儀なくされた。公的には定期的に踏み絵を踏むなどの形で自らがキリシタンであることを否認し続け、仏教徒としての生活をし、神道などに由来する地域の宗教的習俗を大事にしながら、2百年余り自分達固有の宗教的アイデンティティを維持してきた。「潜伏キリシタン」という名で現在呼ばれているこの人達は、禁教令以降の迫害の下で、とりわけ1640年（寛永17年）以降の寺請・宗門人別帳制度の施行により日本国民総仏教徒化が強制される中で、キリシタンという先祖伝来の宗教的立場を、社会的には佛教徒を偽装しながら、頑固に守り通そうとしてきた。

潜伏キリシタンの人達は必ずしも彼らだけの集落を作っていたわけでない。多くの場合は集落の他の人達と軒を並べて住み、九州北部の貧しい農漁村に共通に見られる日常生活を送っていた。毎日男は農作業に出掛けたり、あるいは海に漁に出かけたりし、女は家事や育児をやりながら農作業をやり、あるいは浜に出て帰ってきた船から魚を下ろす作業をしたりする。そして男も女も集落の中で割り当てられた役割を果し、集落の寄り合いに律儀に顔を出していた。

しかし潜伏キリシタンの人達は、時に、自分の家は他の家とは違うことを鋭く意識させられることがあった。日によっては他の人たちは働いていても自分たちは働きに出てはいけなとか、日によっては食べ物に制限があったり夫婦の交りをしてはいけなかったりする。これは潜伏キリシタンの集団を束ねる帳元の人が、キリシタンとしての日々の生活を規定し意味づけるものとして伝えられてきたバスチャン歴（1634年の太陰歴に基づく教会暦＝典札暦であり、「日繰り」とも呼ばれていた）を繰って、自分の集団に属する各組に伝達するその日その日の意義や禁忌、祭祀に従ってのことである。

また自分たちが檀家として所属しているお寺の法事などにはきちんと参加していたが、後でこっそりとお経消し

のオラショ（お経を唱えたり耳にしたりした悪い効果を消すための祈り）を唱えなくてはならない。特に身内に死人が出た時には、お寺で葬儀を行いながら近くの家でキリシタンの役職者が密かに「経もどし（あるいは経くずし）」のオラショを唱えなくてはならない。また子どもが生れたらキリシタン本来の大事な習俗である水授け（パウチスモ=洗礼）を密かにしなくてはならない。

これら全ては自分たちの先祖であるキリシタンから伝えられてきたものであり、これを変えたり疎かにしたりすれば御先祖様に顔向けできないし、悪くすれば罰が当たる、と考えられてきたのである。御先祖様からの大切な言い伝えは、潜伏キリシタンの幹部達によって伝えられてきている。また、オラショ（祈り）は、言葉の意味は十分には分からぬものの、これを定められた通りに口にすれば、悪いことは起こらないし、時には良いことが起こることがある。また「十ヶ条」と呼ばれるキリシタン教義を10個の短文に要約したものも伝えられており（生月・平戸地方では11ヶ条）、これだけは知って覚えておかななくてはならない<sup>（注2）</sup>。これが彼らの基本的な習俗である。日常生活に根ざした宗教であるが、精神性（スピリチュアリティ）という点では特別に深い何かがあるわけでない。まさに「習俗」の宗教であって、「覚」の宗教としての在り方は全くと言っていいほど見受けられない。

彼らは洗礼を受ける水方（あるいは水役）・年間行事の日取りを決め諸行事の執行役となる帳元（あるいは帳方）・連絡責任者である取次役（あるいは宿老）の3役を中心として固い結束を維持し、1873年（明治6年）に明治新政府が禁教令を撤廃するまで、キリシタンの伝統に立つ固有の宗教性を持った集団群を維持し続けてきた。また、彼らの中の少なからぬ人達（集団群）は、信仰の自由が保障されるようになってからも、キリシタンの母体であるカトリック教会に帰ろうとはせず、自分達独自の信仰集団を維持し続けている（彼らは現在では「隠れキリシタン」と呼ばれる）。宣教師も教会もないまま、先祖伝来のキリシタンの習俗と信仰が、長い年月の間、こうした形で伝えられてきたわけである。

潜伏キリシタンの基本的な在り方は、先にも触れたように、個人的な信仰（「信」あるいは「覚」）に根ざすものというより、父祖から伝わってきている毎日の生活の仕方や人生の送り方を、自分達の家族も忠実にやっていく、ということである。そして、それが表面的には旦那寺の檀家として振る舞いながら、秘められたところでは帳方の示してくれるキリシタンとしてのカレンダーに従って日常生活を送る、という「習俗」をもたらししていたのである。そういう中で、父祖も味わってきたのと同じ強い警戒感と緊張感を維持しつつ自分らと宗旨の違う人たちと付き合い合っていく、ということもまた彼らの「習俗」の基本的な一要素になっていたと考えてよいであろう。（「習俗」と「信」や「覚」との相互関係については図1<sup>=注3=</sup>を参照）。

「習俗」の基本には、その村落の共同体としての生活様式がある。村請けという形で村落共同体が藩に対する年貢や労役に対する責任を持っていたわけであるが、潜伏キリシタンもその1員として責任を果たしていく、という点では他の人達と同様であった。そして旦那寺に対する義務を守って佛教的行事に参加し、地域の神社の氏子として神社のお祭り等に参加するといった点では、同じ寺や神社に集う他の村人達と同様であったのである。

潜伏キリシタンは、この意味でマルチ・アイデンティティを持って生活していたと言ってもよい。キリシタンとしてのアイデンティティだけが真のアイデンティティであって、他は全て見せかけだけの仮のアイデンティティであったということではなく、〇〇村の村民の1人というアイデンティティも、〇〇寺を旦那寺とする檀家の1員というアイデンティティも、△△神社の氏子であるというアイデンティティも、そこに濃淡の差はあったにせよ、大事なものであったはずである。ただ、状況によっては先祖伝来のキリシタンとしてのアイデンティティが突出して自他に対して問われざるをえない場合があり、そうした時にはキリシタンとしてのアイデンティティに従った対処の仕方をせざるをえなくなった、ということがあったのであろう。後でまた触れるが、明治維新の直前に、未だ禁教

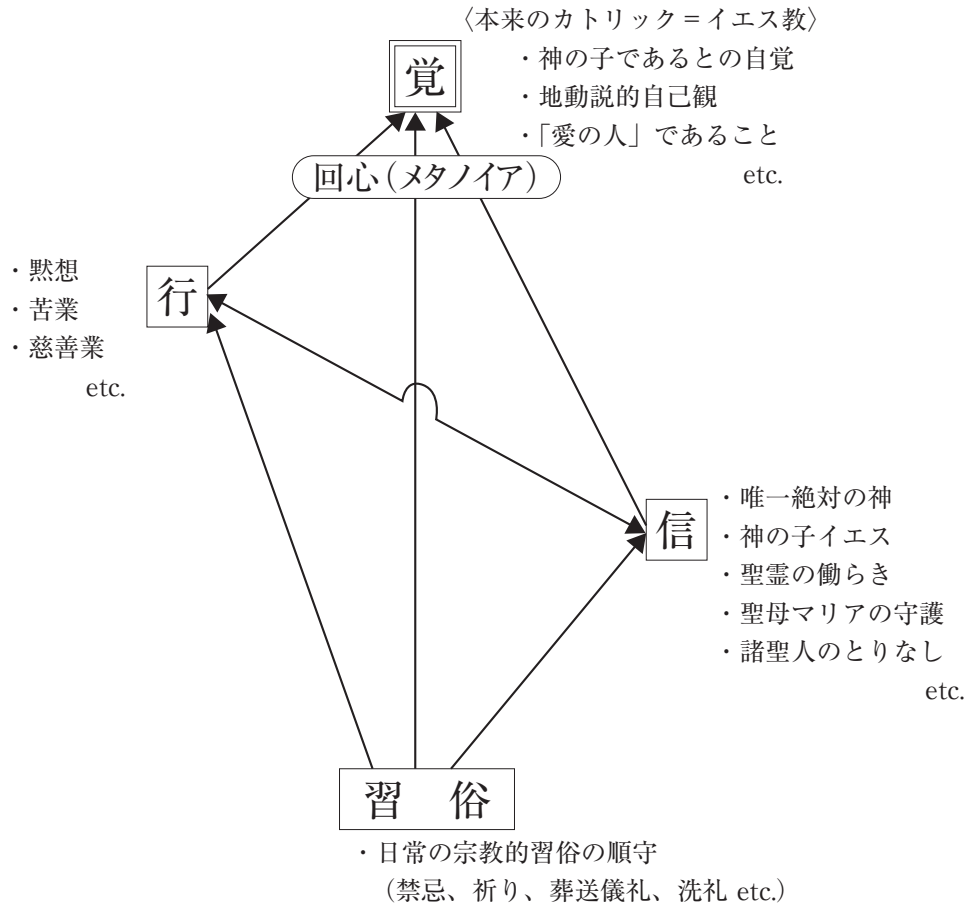


図1 キリシタン＝カトリック信徒に想定される基本的な宗教性

下であったにもかかわらず、先祖からずっと待ちこがれていたパードレ（外人宣教師）が開国に伴って再び渡来してきたということで、何人かが新築の大浦天主堂を恐る恐る訪ねて行き、「自分も同じ信仰を持っています」とカミングアウト（信仰告白）した事件など、まさにそうした特別の状況がもたらしたものであったのではないだろうか。

## Ⅱ. 【『天地始之事』という伝承物語】

こうした中で長崎県を中心とした潜伏キリシタンの2大系統の1つ、外海・五島・長崎の地域の潜伏キリシタンの間で伝承されてきたのが、『天地始之事』と称される物語であった。（ちなみに後1つの潜伏キリシタンの系統は生月・平戸の地域のものであり、若干の習俗が異なる）。この伝承物語を拠り所とすることによって、外海等の地域の潜伏キリシタンは、自分達の宗教的習俗を基礎づけ、その信仰生活を生きてきた。少なくとも、この物語に述べられている内容を疎かにしていいということであったなら、長い年月の間、これだけ大部な物語が語り継がれることはなかったであろう。御先祖様から大事に伝えられてきた物語だから、そして自分達の日常の特異な生活様式を基礎づける大事な物語だからということで、伝承の役に当たった人はきちんと暗誦し、特別な時と場で仲間に語り、そして次の伝承の役の人が決まったならば、御先祖様から受け継いだものをそのままそっくり伝えようと指導に努めてきたのであろう。

しかしながら、『天地始之事』に語られている内容の全てが、そのまま潜伏キリシタンの誰もが共有する基本的世界観（＝コスモロジー）になっていたと、安易に考えることにも躊躇がある。伝えられてきた行事やオラシヨな

どの由来や根拠を語るような時に、「～ということなんだそうだ」とか「～と昔から伝えられてきている」といった形で内容の一部が語られる程度だったのではないだろうか。物語の全貌を知っていたのは、ごく少数の役職者だけであったのではないか、と思われる。しかしながら、この物語の全貌を知る役職者が指導者として日常的習俗を導いて来たわけであり、外海等の潜伏キリシタン各集団の宗教的習俗と日常的な信仰の基盤にはまさにこの『天地始之事』があった、ということを否定することはできない。

伝承物語は、口から口にと伝えられていく中で、年月が経ち伝承の代を重ねていくに従い伝えられる内容が少しずつ変容していく。『天地始之事』という名で伝承されて来た物語の内容の場合も、その例外ではない。キリシタン宣教師が彼らの先祖に教えた聖書や教義書を基にしながらも、長年の間に（文政年間〔1818～1829〕に聞き取りの「善本」の場合なら2百年近くの間に）、伝承してきた人たちの間で、特別に意識することなく自分たちの理解しやすい形へと内容の取捨選択や脚色が行われてしまっている。また彼らが居住していた地域の神道的あるいは佛教的な諸要素や土俗的な説話等も付け加わり、元々の聖書の内容や正統的なキリシタン教義（1549～1614頃までのカトリック教会の公式教義）とは、かなりズレを生じたものになっている。

こうした点を検討してみることを通じて、16世紀半ばに伝来したキリシタンの教えのどのような部分が結局のところ日本の民衆に受け止められ受け入れられたのか、世をはばかり宗教的習俗を守り続けていく中で彼らの信仰と習俗を支える土壌となっていたものは何であったのか、等をうかがい知ることができるであろう。また、それを通じて、当時の長崎周辺の民衆の持っていた宗教的感性や発想も見えてとることができるはずである。こうした検討を通じ、キリシタン教義が日本の民衆の中に「受肉（インカルネーション）」されていった際の基本的な精神的土壌（日本的霊性＝日本教的な感性と発想）の特性も、少しは明らかになってくるのではないだろうか。

### Ⅲ. 【『天地始之事』は父性的宗教の母性化的変容を示すものなのか】

当時のキリスト教の日本的土壌への「受肉」あるいは「土着」をめぐるのは、遠藤周作の「父性的宗教の日本での母性化」という見方がある。父性的とは、唯一絶対の神が存在し、人々に厳しい規範を与え、それに基づいて人々を厳しく裁く、というタイプの宗教であって、キリスト教の源流となった古典的ユダヤ教（モーセ教）にその典型的な姿を見ることができる。これに対して母性的な宗教とは、唯一絶対の神ということを必ずしも表に出すのではなく、基本的には人々の間に寛容と愛を勧め、裁きよりは許しと包容をもたらす宗教である。実はイエス自身の説いたところ（イエス教）は、この意味での母性的な面を強く持っている。またキリシタン宣教師の祖国イタリア・スペイン・ポルトガルなどのキリスト教も、伝統的にマリア信仰が強く、むしろ母性的なものと言ってよい。しかしながら、日本に来たキリシタンの宣教師の多くは、異文化に対する「文化的精神的な征服」の意欲が高かったためであろうか、モーセ教に先祖返りしたかのように父性的な面を強く打ち出した形でキリスト教の宣教をしている。遠藤周作も「不幸なことに切支丹時代の宣教師たちは日本人信徒に、基督教の持つこの『母の宗教』的要素をあまり知らしめなかった。それよりも、きびしい『父の宗教』的部分を強調し過ぎたようだ」と述べている<sup>（注4）</sup>。

いずれにせよ、遠藤周作は宣教師の居なくなった後の「後期かくれ切支丹」達は毎年定期的にイエスカマリアの像を踏みつける踏み絵を強いられ、キリシタンからの転向者であることを繰り返す公にさせられ、そのため自分達が背教者であるという強い負い目を持って生活してきた、と強調する。そうした負の色彩の強い自己概念を持って先祖からの信仰を密かに守り続けてきた人達であるから、そこでは「後悔と許しの信仰」にならざるをえない、とするのである。信仰を貫き通して殉教するのでなく、踏み絵をして背教者となり、社会的には隠れた形ごまかした形で、先祖から伝えられてきたキリシタンとしての習俗を日常的に大事にしてきているとするならば、それを支え

る心情は、後悔し許しを求めるものでしかないであろう、ということなのである。このため『天地始之事』の内容も、そうした「後悔と許しの信仰」を反映した母性的なものにならざるをえない、と見るのである。端的に言えば、毎年定期的に踏み絵を強いられる潜伏キリシタンは、踏み絵によって毎年深い罪悪感を新たにし、そうしたイエスやマリアに対する裏切りも含め全てを許し受入れてくれる母性的なものを心から求めざるをえない。それが彼らの信仰の基盤となって、先祖が宣教師から聞いた話を母性的なものへと変容し、この伝承物語の基本的なモチーフとなっているのだ、というわけである。

こうした見方は、一見非常に説得力を持つが、余りにも図式的で、私には必ずしも賛成できるものでない。遠藤周作の見方は、自立した個人として自分の責任で自分の言動を決定し、それについて自分で最後まで責任をとっていく、といった自我中心的な近代的人間観が暗黙の前提になっているように思えてならない。潜伏キリシタン達は、踏み絵にしてもキリシタンの習俗にしても、基本的には、先祖から伝わった生活様式であるとして、全てをひっくり返す大事に守っていたのではない、個人としての葛藤を経る踏み絵をしたり、寺院での法事に参加したり、経消しのオラショを唱えたりしてきたわけでは必ずしもないのではないかと私には思われてならない。もちろん先にも述べたように、やむにやまれぬ時が来れば、自分がキリシタンであることをカミングアウトせざるをえない、ということはあってもである（このカミングアウトにしても、キリシタンとしての伝統を伝えてきたご先祖様を裏切るわけに行かない、という面が強かったのではないだろうか）。

いずれにせよ、本書で『天地始之事』の内容を具体的な形で検討していく中で、この問題は常に念頭に置くべきものの1つと言ってよいであろう。

#### IV. 【潜伏キリシタンのカミングアウトと『天地始之事』の出現】

幕末の1865年（慶応元年）2月17日、幕府の特別許可の下に長崎の地に外国人居留民のためのものとして建てられた欧風の大浦天主堂の献堂式（竣工式）が挙げられた。この直後の3月17日、大浦天主堂に14、5人の老若男女が訪れて、自分達は同じ信仰を持つ者であるとフランス人神父に対して訴えた。これが江戸幕府の禁教政策の下で日本社会から消滅したはずのキリシタンが、公然と世の中に現れ出た、という事件であり、カトリック教会側からは「信徒再発見」と呼ばれ、日本のカトリック教会の歴史の上で大きな重要性を持つものとされている出来事である。

この日以降次々と潜伏していたキリシタンが天主堂を訪れる中で、名乗り出た潜伏キリシタンの一人（洗礼を授ける役＝水方＝であった浦上のドミンゴ岩永又一）が、パリ外国宣教会のプチジャン神父（後に長崎司教）に手渡したとされる文書類に含まれていたものの一つが、『天地始之事』であった。これによって、潜伏キリシタンに伝承されてきた教典的物語の存在が初めて確認されたわけである。

片岡弥吉<sup>（注5）</sup>によると、プチジャンが教区長ジラルに送った1865年5月1日付けの手紙の中で、次のように書いているという。

ブリット洋経由の手紙でいつかあなたにお話した“Tendjino Hadjimari no koto”という本のようなものを、できるだけ早くあなたに送りたいと念願しています。この本は、キリシタン用語で書かれており、私たちの信者から貰ったものですから、あなたにとって有益ではないかと思います。その本自体は、最初に考えたほど貴重だとは思いません。かなりの伝説がたくみに織りまぜてあるからです。と申しまして、この本の根底をなすものは、キリスト教的なものです。ロカイン神父が間もなく写し終りますから、あなたは、やがてその本をごらん



なれると思います。

田北耕也は、プチジャン神父が同じ1865年の4月14日の日記に、このドミンゴ岩永又一から『天地始之事』という浦上にある只1冊のキリスト教の教理本を手渡されたことを次のように書いているという<sup>(注6)</sup>。

彼（浦上のドミンゴ又一）は、浦上にあった只1冊のキリスト教の教理本を渡した。「天地始りの事」と題し次の言葉で始っている。『我々が尊ばねばならぬ天の御主デウスは人間万物の御親にてまします云々』と。それは1822年か1823年の頃口伝のままを書き取ったものらしく、創造説、天使、人祖の堕落、救世の約束などを記してあった。あちこちに、書写、翻訳中に生じた誤りがあるが、一見する所大した事ではないようである。

なお、プチジャン神父の同僚で、後に長崎教区の副司教となったサルモン神父は、浦川和二郎（後の仙台司教）に、「あとでよく調べて見たら随分と奇怪な伝説を交えた、取るにたらぬものだった」と話したという。これは、田北耕也が『天地始之事』を再発見した折に浦川和三郎が口にした懐旧談だったとのことである。結局のところ、ドミンゴ岩永又一がプチジャン神父に手渡したものは捨てられてしまったようで、所在不明である。

## V. 【田北耕也による執拗な『天地始之事』探し】

この『天地始之事』の筆録本の発見に努め、その収集に長い年月を掛け多大な精力を費やしたのが、田北耕也であった。1928年（昭和3年）に長崎市郊外で隠れキリシタンの資料を探索し始めてから、長崎県各地を訪ね歩き、ハプニングの連続の中で、最終的に9種類の筆録本を見付けている<sup>(注7)</sup>。この間の苦労話を、皆川達夫との対談の中で、彼は次のように語っている<sup>(注8)</sup>。少し長くなるが、状況を具体的な形でイメージすることができると思うので、ここに紹介しておくことにしたい。

黒崎地方では、仏教徒とカトリックがいきりまじっているのです。（中略）。黒崎地方の家を一軒一軒片っ端から、どの家が仏教で、どの家がカトリックか調べて分類しようと村の俯瞰写真で始めたんですが、容易な仕事ではありませんでした。（中略）。

ある日、小学校の先生で川原菊一という小学校の先生にしつこく、一軒一軒を指さして「この家は仏教徒なのか、カトリックなのか」と聞いてもはっきり答えてくれない。それで、これはおかしいと思って、何回も何回も喰い下がっていくうちに、「言ってもらっちゃこまるけれども、この家は本当は仏教徒じゃないんです。表面は禅宗の檀家、内実はカトリック教徒にもならない昔のままのキリシタンなんです」と事実をはじめて言ってくれたんです。（中略）。

黒崎には宿屋がないので、たびたび川原先生の所に泊めていただきました。ところが、同じ黒崎小学校の先生で「川原さんの所ばかり泊まらずに私の所にも来て下さい」と言う方が現れ、私は喜んでその人の下宿している本田さんというお百姓さんの家に行きました。その先生は熱心に私の経歴を聞くので、結局、一灯園とフランシスカンの話になってしまったのです。夜遅くまで話し、翌朝、私が去ろうとして、ズックの靴のひもを結んでいけると、宿主の本田さんが、「すまなかったが、昨夜あなたがたの話が隣の部屋ですっかり聞かせてもらった。あなたは大学まで出ておられるのに、そんな粗末な身なりで何遍もこの村に来ておられる。今日はあなたにいい人を紹介しましょう」と言って、連れて行ってくれたのが、なんと、それまでにたびたび寄ったことのある峠の茶

屋でした。本田さんはその茶屋の前に私を待たせておいて、家に入ったまま、なかなかでてこない。やっと出てきて私に紹介してくれたのが、よく知っている助爺さんでした。その助爺さんに「この人には何を話してもよかケン」と言って、本田さんは去りました。(中略)。

本田さんの所に泊ったのは一九三一年(昭和六年)二月七日でした。初めて訪れた時から一年以上たっています。初訪ではカトリック信者か仏教徒かを知るのが目的ですから、助爺さんが私の問いに答えて「神道サイ」と言うので神道の信者もいるのだナと思い、キリシタンはこのあたりにおらんか、と尋ねると「キリシタンのゴタおらんバイ」。今から思えばこの答え方に少々匂うものがあつたはずですが、気づきませんでした。

(中略)。

「何でも話せ」と言われたこの助爺さんを、私は大切にし、まずその安心感を増幅するため、老人の好きな義太夫を聞いてあげたり、このあたりで狐が化けて出たというバカゲた話に耳を傾けたりしたものです。峠の茶屋に一人で住み始めた時、本当に白狐が出たと爺さんが話すのです。そのほか、私は床下の芋を取り出すのを手伝ったり、水を運んであげたりもしました。ある時、夜まで話しこんで、そこに泊めてもらいましたところ、「あいにく油が切れてノー」と言うので、坂下の永田の浜まで灯油を買いに行ったこともあります。実は油が切れたのではなく、たいていの日が油のない生活でした。貧しい生活への同情から、だんだん親しくなり、珍書の発見に発展していったのです。

(中略)。

耳だけでなく目で見えるものも出てきました。助爺さんが神棚から十枚ほど半紙を綴じたものを持ってきて、「これっくらいいの(と親指の爪を出して)活版にしてくれまっせ」と言うんです。見ると手製の祈り本なのです。私にとっては思いがけない大発見ですが、喜びの色をかくし、京都大学に持って帰って、『広辞苑』を編集した新村出先生に見せました。(中略)。

京都大学で祈り本のコピーを百冊作って爺さんのところへ持って行き、「1冊三十銭だよ、あんたが売ってくれるなら、半分分け前をあげるよ」と言ったら、爺さんは喜んで売り歩いたんです。次に行った時、「何冊売れた?」と聞いたら、「よく売れるわ、よか本ば作ってくれたっチュウてノウ」と言うので、売りに行った先を尋ね、大野(ウウノ)とか、畝刈(アゼカリ)とかの地名を聞き出し、こっそり足をのばして行つたんです。その本には「パーテル・ノステル」、「アヴェ・マリア」が彼らの言葉で書いてあります。私はそれを爺さんの口調で暗記しました。その熱心さを見て爺さんは「お前もキリシタンの子孫か」と尋ねるほどになりました。(中略)。

その助爺さんがその内「まだよか本のあるばってん」と言って例の神棚からとり出したのが、黒い二冊の小学ノート本、それが『天地始之事』上下二冊でした。あとでだんだんわかってきたんですが、当時九十一歳の紋助爺さんが全部暗誦していました。二万字ぐらいのものを暗誦しているのですから、びっくりしました。

「そもそもデウスと、うやまい奉るは、天地の御あるじ、人間万もつの御おやにて、ましますなり。式百そうの御くらい、四十二そうの御よそをい、もと御一たいの御ひかりを、わけさせたまふ所すなはち日天也」

と、リズムをつけて流れるように唱えるのです。私もたびたび繰り返すうち暗誦できるようになりました。この思いがけない大収穫のあった晩は、川原菊市さんの家の隣の戸籍吏M氏のお宅に泊めていただき、川原さんもまじえて、この本を読み、語りつつ寝たものです。このカトリック信者の川原さんも、隠れキリシタンのMさんも全然知らない物語でした。

本の表紙裏には、

「天地始メノ事、是レヲ書ク頃ハ大正拾五年旧十一月中頃デアリマス、此本ムヤミニ貸シマセン」

と書かれてありました。(中略)。

私は一体この本がどうして作られたのか、その原本を捜したくなり、それがきっかけで隠れキリシタン村をことごとく歩きまわりました。研究費をもらっているので歩くには十分お金も時間もあるのですが、でも交通機関がないから、仕方なく錆びた自転車に乗ってまわりました。どうせ辺鄙な村や島にしか残っていないと思ったので、山坂を越え荒海を渡って探しました。結局、西彼杵半島と五島列島の各地で、七年間に八冊の写本を入手しましたが、原本はとうとう見つかりませんでした。

こうした筆録本の発見と収集の経緯については、田北耕也が1954年（昭和29年）に刊行した『昭和時代の潜伏キリシタン』（日本学術振興会）に詳しく述べられている。

なお片岡弥吉は、田北耕也が入手したのとは別の『天地始之事』を、三一書房から1972年（昭和47年）に刊行された『日本庶民生活史料集成 第十八巻』に収録している<sup>(注9)</sup>。こちらのものは、長崎県外海（ソトメ）町黒崎の帳方と水方を兼ねていた村上近七（1971年＝昭和46年当時76歳）が所持していた和紙2つ折横綴じ28枚56丁のもので、巻頭に「此ノ本ヲ 見ル時ウヤマイテ見ルコト。必ズソマツナ取りアツカイタサヌヨウ注意スルコト」と本文と同じ筆跡で記されていたという。明治時代に村上近七の兄である村上忠蔵（帳方だったという）が筆録したものと言われている。

我々が関心を持つ『天地始之事』は、こうした背景を持つ伝承物語である。

### 【関連文献】

梶田叡一『不干斎ハビアン思想』創元社、2014年。

### 脚注

- (注1) ここでは、『キリシタン書・排邪書（日本思想大系25）』岩波書店（1970年）に収録された田北耕也校注のテキスト（長崎県西彼杵半島東檜山の下村善三郎が所持していたという所謂「善本」）を取り上げる。これは文政年間（1818～1825）に筆録されたものとされる。また、これと同時に『日本庶民生活史料集成第18巻』三一書房（1972年）に収録されている片岡弥吉校注のテキスト（「村上本」）をも適宜参照する。これは、明治年間（1868～1912）に村上忠蔵が筆録したものとされる。両者はほぼ同一の内容である。なお、『天地始之事』の読み方は、片岡弥吉の検討に従い、「てんちのはじまりのこと」とする。
- (注2) 片岡弥吉が純心女子短期大学蔵のものを紹介している。（『日本庶民生活史料集成 第18巻』三一書房、1972年、p989～991）。
- (注3) 梶田叡一『不干斎ハビアン思想』創元社、2014年、のp211～218に詳述したところと関連する。この図そのものはここに初出。
- (注4) 遠藤周作「日本の沼の中で－かくれ切支丹考」『切支丹時代－殉教と棄教の歴史』（小学館ライブラリー）、1992、p208。
- (注5) 片岡弥吉「天地始之事 解題」『日本庶民生活史料集成 第18巻』三一書房（1972年）、p1001。
- (注6) 田北耕也「隠れキリシタン発見余聞」、皆川達夫『対談と随想 オラショ紀行』日本基督教団出版局、1981年、85～111。このうち、特にp97。



- (注7) 前掲の『キリシタン書・排邪書（日本思想大系25）』の解説に、田北耕也がこれら9種の記録について、その筆録時期や筆者、紙質や大きさ、筆跡等の特徴について、表の形に纏めて示している（p634）。これによると、文政年間に筆録されたものが2種、明治時代に筆録されたものが2種、大正時代に筆録されたものが4種、筆録時期不明のものが1種である。なお、原本的なものは発見されていないが、ここに参照している下村善三郎が所持していたものが、最も整ったものであるとされる。片岡弥吉の紹介する村上本は、この9種のリストには含まれていない。
- (注8) 田北耕也「隠れキリシタン発見余聞」（上掲書）。特にp88～97。
- (注9) 片岡弥吉「天地始之事」（『日本庶民生活史料集成 第18巻』三一書房、1972年、p1001～1019）。特に最初の「解題」に発見の経緯等が述べられている。